

女子高校生における学業的自己概念の偏りと抑うつ傾向の関連 —3年間の縦断データから—

○宮本友弘 (東北大学)
鈴木悦子 (聖徳大学)

相良順子 (聖徳大学)

キーワード：学業的自己概念、抑うつ傾向、縦断的研究

問 題

学業的自己概念 (Academic Self-Concept, 以下, ASC) は、それ自体が重要な結果変数であると同時に、他の望ましい心理的、行動的結果を促進する重要な媒介変数とされる (外山, 2008)。しかし、相良他 (2015) の女子高校生を対象にした調査によれば、英語の ASC を学業成績に比して過小に評価する場合、自己価値の評価が低下した。自己価値は抑うつ傾向と強い負の相関があることから (相良他, 2016)、こうした ASC の偏りは、不適応を招く可能性がある。この点について、高校3年間の縦断データから検討する。

方 法

調査対象 首都圏にある私立女子高校 201X 年度入学者 178 名及び翌年度入学者 160 名。

手続き ASC と抑うつ傾向については毎年7月に質問紙を実施し、学業成績は毎年実施されている標準学力テストの結果を利用した。なお、本研究は聖徳大学「ヒューマンスタディに関する倫理審査委員会」の承認を得て実施した。

ASC 国語、数学、英語について「どのくらい得意か」を5件法で尋ねた。

抑うつ傾向 日本版 DSRs-C (18 項目, 3 件法)。

学業成績 ベネッセのスタディーサポートの国語、数学、英語の成績 (全国を基準とした偏差値)。

結 果

ASC の偏りの類型化 全学年・教科で ASC と学業成績の間には有意な正な相関がみられた。そこで、学業成績から予測される ASC と実際の ASC の間のズレ (残差) を求めた。全残差を使用してクラスター分析 (Ward 法) を行い、デンドログラムから4クラスターが妥当と判断した。Figure 1 の通り、CL2 は3年間、本来の学力以上に国語が得意

と評価する「国語得意」群、同様に CL3 は「英語得意」群、CL4 は「数学得意」群、一方、CL1 はいずれの教科も実力ほど得意とは評価しない「全般不得意」群と命名した。

偏りの類型による抑うつ傾向の比較 4 類型の抑うつ傾向を比較した。Figure 2 の通り、全学年で英語得意群と全般不得意群の差が有意であった。DSRS-C のカットオフポイントは16であることから、全般不得意群は抑うつ傾向が高かった。

考 察

以上、学業成績に比して ASC を低く評価する生徒は、抑うつ傾向が高くなることが示唆された。一方、特定の科目、とくに英語の ASC を高く評価する生徒は抑うつ傾向が低くなる。女子高校生の ASC 形成における他の教科との比較 (内的準拠) の影響 (宮本・相良, 2018) を踏まえ、「英語ができる」ことの心理的な意味を探究する必要がある。

付 記

本研究は科研費 (26380949) の助成を受けた。

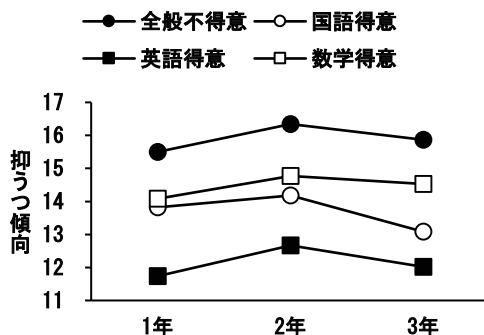


Figure 2 各群の抑うつ傾向

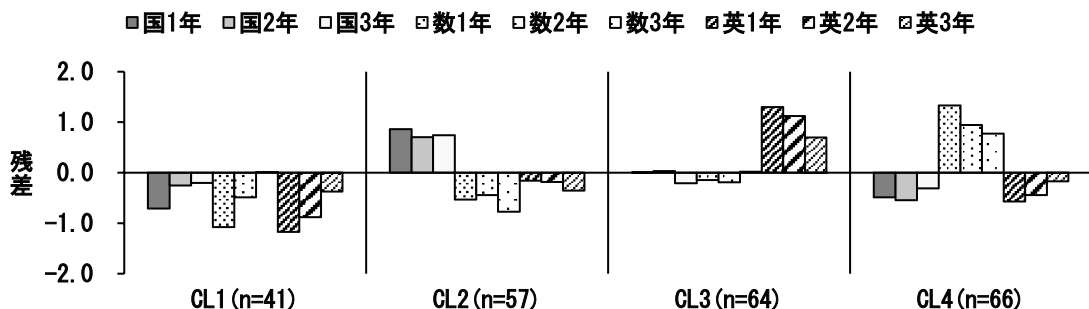


Figure 1 各クラスターの特徴